

Soccer News SHIGA

〒524-0212 滋賀県守山市服部町2439番地 TEL:077-585-0982 FAX:077-585-0983

2020.10 No.61

発行 公益社団法人
滋賀県サッカー協会
責任者 専務理事 前田 康一
shigafa@oregano.ocn.ne.jp
http://www.shigafa.com/

非日常の2020年度

公益社団法人 滋賀県サッカー協会(SFA) 会長 森津 陽太郎



2020年の幕開けは、1月19日に開催しました滋賀県サッカー協会創設70周年の記念式典・祝賀会でスタートしました。式典では「滋賀県サッカー協会創立70周年を迎えられた感激の中『サッカー競技の普及・発展を図ると共に、県民の豊かなスポーツ文化の振興、心身の健全な発達に寄与する』という滋賀県サッカー協会の理念に基づき、フェアプレーやリスペクト、暴力・暴言の根絶などを浸透させ、滋賀の将来に向けて『豊かなスポーツ文化の確立』『サッカーの普及・発展』にも協会関係者が一致協力して引き続き努力を続けていく覚悟をお伝えして」とあいさつさせていただきました。この思いは引き続き大事にして取り組んでいきます。

ところが、ご承知のようにその後新型コロナウイルスの拡大防止のためにあらゆる活動を自粛するよう要請され、学校も休校となりました。やっと、学校は再開され、各クラブ、チームの活動、また、サッカー協会の事業も再開しましたが新型コロナウイルスの脅威は今も心配な状況が続いています。いつもとは違う非日常の活動となっているのではないのでしょうか。どうか感染拡大防止の取り組みは引き続きよろしくお願いいたします。

しかし、非日常の活動の中で改めていろいろな活動について取り組み方も見直しがされています。特に夏場では、新型コロナウイルス症への感染防止と熱中症予防の取り組みを進める中で、まずは命の大切さを最優先で取り組

むこととなりました。当然のこととはいえながら、活動中の飲水の重要性、日頃の健康観察の大事さ等を改めて感じています。技術がうまくことや勝利を目指す前に健康で安全に行えるスポーツであるべきです。また、指導者や審判の方々の研修もオンラインによる対応が増えています。対面や集合スタイルでなくてもできることがあるのだということも分かってきました。コロナウイルス後もこういった取り組みや対応は必要などころでは残していきたいと思います。

さて、鹿児島国体が中止になったことで開催時期は少し流動的ですが、2024年には滋賀県で2巡目の国体が開催されます。各種別、連盟が強化策を進めているところです。2巡目国体で選手として活躍できる年代の強化はもちろん、この取り組みが今まで以上に滋賀県サッカーの普及・発展・強化につながっていくような仕組みをしっかりと作ることも大事だと考えています。しかし、70周年の祝賀会席上でも話題となっていた、滋賀県にJリーグやなでしこリーグに加盟するチームの誕生などはなかなか見通しが立たない状況ではあります。大きな原因の一つはスタジアム問題です。関係機関などへ働き掛けながら引き続き取り組みを進めたいと思っています。来年はJFAが100周年を迎えます。女子のプロサッカーリーグもスタートする予定です。日本全体の動きにも目配りをしながら遅れを取らないような活動を進める必要があります。滋賀で育った選手が地元滋賀で活躍できるように、今後も皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

令和2・3年度 (公社) 滋賀県サッカー協会 役員

会 長 森津陽太郎
副 会 長 藤澤 輝彦
副 会 長 中島 浩之
副 会 長 岩崎 崇
専務理事 前田 康一
規律・フェアプレー委員長
村井 滋一

理 事 奥田 援史
理 事 坂尾 美穂 (新)
理 事 光吉 英宣
理 事 増田 一博
理 事 渋谷 享一 (新)
理 事 半田 央人 (新)
理 事 瀬古 正志

理 事 泉 憲舟
理 事 石田 和成
理 事 吉田 和弘
理 事 藤本 計之
理 事 大谷 浩志
理 事 杉本 聡
理 事 鳥家 浩司

理 事 梅田 英幸
理 事 福島 隆志
理 事 小林 昌明 (新)
理 事 塩谷 壽朗 (新)
監 事 増田 義行
監 事 橋本 猛秀

Football Referee Life ～始まり～

プロフェッショナルレフェリー(PR) 今村 義朗



私がサッカーの審判を始めたのは、プロサッカー選手を目指し、ルネス学園甲賀総合科学専門学校(現:ルネス紅葉スポーツ柔整専門学校)を選び入学し、練習試合で審判をやったことにさかのぼります。夢を見て入学してから25年、2020年2月選手としてではなくプロ審判(以下PR)として契約をさせていただくことができました。この契約のためには、日本サッカー協会小川佳実氏(元審判委員長)や審判部の方々はもちろん

ん、関西サッカー協会、滋賀県サッカー協会森津陽太郎氏(現滋賀県サッカー協会会長)そして審判委員会の皆様のご尽力のおかげとっております。そしてPR契約にあたり、東レ(株)の皆さんの理解によるスムーズな退社、また家族の理解があつてこそ進めた道だと感謝しております。

昨シーズンの最後は後厄だったせいか、怪我をしたまま終わりました。今シーズンは、コロナの心配もありましたが2月8日(土)13:35 kick off FUJI XEROX SUPER CUP 2020 横浜F・マリノスvsヴィッセル神戸、PK9人連続失敗という印象に残る試合からPRとしてスタートを切りました。そこからJリーグは第1節のみ開催し、コロナの影響で延期が続き6月27日(金)J2からの開催で再スタートを切りました。本当に今シーズンは、我慢のシーズンだと思います。

現在私たち審判員は、毎朝体温チェックなどを報告、毎週土・日曜開催時にはスタジアムでPCR検査キットによる唾液の採取、木曜日に検査結果が送られてきます。もちろんマスクの着用、手洗いうがい消毒液携帯、新型コロナウイルス接触確認アプリCococaの活用なども行つて気をつけております。

さて今現在(8月末)再開してから2ヶ月、またPR契約させていただいてから半年ですが、正直まだ実感が湧いておりません。PRとしての活動は、本来ならば月1回集まって体力向上トレーニング、試合分析な

どを行います。今は3密を避けるため、zoomを活用した研修会が中心で、実質試合だけが活動となっております。その中でPRとしてやるべきことはたくさんあると感じております。

基本的には日々のトレーニングはもちろん、体調管理、試合の自己分析などがあげられます。PRとして自己研鑽(自分がすでに持っている技術を高めたり、知識を深めたりすること。)や、自己啓発(意識改革によって何のためにスキルアップを目指すのか、なぜ行動を改善するのかといった意識を持つように努力すること、また自己を人間としてより高い階段へ上昇させようとする行為。)を行い、自分自身ををじっくり作り上げ、感謝の気持ちを忘れずに生きたいと思ひます。



今村 義朗(いまむら よしろう)
1977年3月5日生(43歳)

【審判員歴】

- 1998年 2級取得
- 2004年12月 1級取得
- 2005(J副審兼務) ~2007年半期 JFL主審41試合
- 2007年半期~ 2010年半期 J2主審 (2009年~2014年 中国スーパーリーグ) (2010年 イングランド交流プログラム)
- 2010年半期~現在 J1主審
- J1主審通算=128試合(副審=2試合)
- J2主審通算=155試合(副審=6試合)
- 天皇杯=33試合 ●リーグカップ戦=17試合(2020.8.31現在)



女子サッカーの現状とこれから

びわこ成蹊スポーツ大学サッカー部(女子)監督 坂尾 美穂



2011年までしこJAPANが世界を魅了したWorld Cup優勝から2大会が過ぎました。昨年行われたフランス大会では、成長著しいオランダが初のファイナリストとなりました。スタジアムに50,000人を超える観客が入った試合も複数あり、決勝では、平均8,200万人の世界中の観衆がLiveで試合を視聴したとのこと。参加24か国の中で、9人の女性が監督としてチームを率い、その中には、過去、男子プロクラブでの監督経験や、他国でも監督として代表チームを率いた経験がある

指導者もいます。今後、世界的に見ても、女子サッカーの進歩はさらに加速していくのではないのでしょうか。

今回は、日本国内の女子サッカーについて、自身の経験を踏まえながら「女性指導者」「女子選手の指導」というテーマで話を進めます。

【女性指導者】

私自身、国内外問わず、多くの指導者講習会に参加してきました。女性指導者を対象としたものを除いた講習会において、共通していたことがあります。それは、「女性の受講生はごくわずか」。さらに言えば、公認ライセンス講習会においては「女性は自分ひとりだけ」という状況がほとんどでした。

指導を始めて20年が過ぎようとしていますが、当時から現在も共通している、サッカー界の課題は「女性指導者の育成」です。これまで担当してきた日本サッカー協会の仕事でも、それ以前に関わっていたトレーニング活動においても、様々な地域・県的女子サッカー事情を目にする機会に恵まれましたが、女性指導者の発掘・育成はどこにおいても大きな課題でした。

現在は、そのころに比べ、女性指導者は確実に増えてきていると感じますが、まだ十分ではないことも事実です。これからの女子サッカーの発展を考えると、「女性指導者の育成」は不可欠な要素です。

【女子選手の指導】

これまで受講してきた講習会の中で、共通して感じたことがあります。それは「サッカーは男子も女子も変わらない」ということです。講習会で学ぶ内容、同期の受講生達と行うディスカッション、インストラクターから提示される課題の中で、「男子サッカーだから」「女子サッカーだから」という理由で、要求や課題が「異なる」「変わる」ということはありません。あるのは、その時々を対象(選手)やゲーム状況、テーマとする課題によって求めるものや提案する解決策、採用するコーチン

グ手法が変わる、という違いです。もちろん、発育発達過程や身体的な側面における「男女それぞれの特性」があり、指導者はそれに関する知識は身につけておく必要があります。しかし、個々の選手が持っている「特性」「特徴」は、特に育成年代では同性集団の中でも、違いが大きい場合(いわゆる個人差)があり、共通して必要なことは、「目の前の個々の選手に応じた適切な関わり・指導を行う」ということだと考えます。

【将来につながる指導者の育成】

指導者になって、現場で指導を始める場合、まず頼りにすることは、「選手時代の経験」ではないのでしょうか。自身が選手時代に教えてもらった内容、成功したプレー体験やサッカーの考え方、恩師のコーチング手法、仲間とともに成長したその時の環境などです。このような視点に立つと、「現場でよい指導をすることが次世代の良い指導者を育成する」ことにつながると言えるのではないのでしょうか。

そういった意味において、「女子サッカー」においても、適切な環境で効果的な指導を実践すること、そうした過程において「深い意味でのサッカーの面白さ」を感じ、「サッカー」に一生関わってほしい」と感じる女性が増える。その中から、指導に興味を持つ女性が増え、その指導者が女子サッカーの発展の一翼を担うといったサイクルが生まれれば、それはとても意義深いものだと思います。

「上手になりたい」「好き」という気持ちに違いはなく、その想いに答えるべく現在進んでいる女子サッカーの環境向上の流れがこのまま順調に、そして拍車をかけて進んでいくことを願ってやみません。

坂尾 美穂(さかお みほ)

【指導歴】

- 2000~2006年 福岡大学サッカー部(女子部)監督
- 2006~2012年 JFAアカデミー福島 女子コーチ
- 2006~2012年 JFAナショナルトレセンコーチ 東北女子担当
- 2006~2007年 U-15/U-16日本女子代表コーチ
- 2008年 U-17日本女子代表コーチ
- 2010~2011年 JFAエリートプログラム女子U-13監督
- 2010~2014年 JFAナショナルトレセンコーチ 関西女子担当
- 2012~2014年 JFAアカデミー堺 コーチ
- 2014~2015年 MSV Duisburg女子セカンドチーム(ドイツ) コーチ
- 2015~2016年 MSV Duisburg女子U-16チーム(ドイツ) コーチ
- 2017~2019年 JFAアカデミー福島 女子コーチ
- 2019年~ びわこ成蹊スポーツ大学サッカー部(女子)監督